

I はじめに

我々の活動は平成 25 年度加瀬 WG 報告書にも記した通り、実態としては加瀬が主宰する自主ゼミ（通称“つなプロ”）を、東京学芸大学が HATO プロジェクトの一環として進めている教育支援人材養成プロジェクト（代表：松田恵示）に位置づけたものであるが（担当領域：大学カリキュラムの開発）、今回の取り組み（スペシャル・ワークショップ「教育支援人材って何？」はその内、「チームアプローチ」教育のための科目の設置（プログラム／テキスト開発含む））に向けた一種の教育実験といえる。その着想をまず、説明しておきたい。

筆者が主宰する自主ゼミの趣旨は三点に整理することができる。第一に、主に学校教育において子どもを支援する人材、即ち教師・養護教諭・特別支援教育コーディネーター・スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー等を目差す学生諸君が、養成段階から共に学びあう場を創造すること。第二に、その目標とするところは、柔軟な学生の時期から、お互いの専門性・価値観・方法論等の違いを知り、その上で協働する専門職連携のためのマインドを形成し、具体的な知識・技能を獲得すること。第三に、その取り組みを自主ゼミから大学カリキュラムに位置づける手立てを検討し、大学当局と協働して実現すること。この三点である。

本学の場合、この点に密接に関わる動きが二つ存在した。一つが上述の「教育支援人材養成プロジェクト」であり、今一つが平成 27 年度に向けた本学の学部改組である。

本報告の執筆時点（2014 年 7 月）では、未だ最終決定を見ていないが、文部科学省に提出した再編案では現行の教育系を「学校教育系」、教養系を「教育支援系」とし、とりわけ後者は従来の 5 課程 16 専攻を「教育支援課程・教育支援専攻」という 1 課程 1 専攻に改め、その専攻内にソーシャルワークコース、カウンセリングコース等 7 コースを置き、教師と協働する「教育支援人材」養成を行うというものである。

筆者は、現在の学校教育において子ども達が置かれている厳しい状況を目の当たりにする中で、この改革案を強く支持するものである。と同時に、「教育支援人材」とは何かという間に明確に答える責務がある、という立場に自覚的に立とうとしている。

さて、この「教育支援人材」の捉え方、定義については教育支援人材養成プロジェクト内でも幾度か検討がなされてきた。例えば 2014 年 3 月 29 日に開催された「教育支援人材育成推進シンポジウム」におけるプロジェクト・リーダー松田恵示による「教育支援人材の専門性」や「教育支援人材の類型」論（当日資料「取り組みの課題は何か？」参照）、あるいは 2014 年 6 月 17 日の「教育支援人材養成プロジェクト会議（第 3 回）」における「学校教育体制のネットワーク化モデルと人材育成の関係について（当日資料 4 参照）」で示された「学校教員」、「教育支援系専門職員・社員」、「教育支援員」といった類型化と構造モデルがそれにあたる。しかしながら、筆者としては、こうした教育支援人材論に多くを学びつつも、今一つ大きな違和感を拭いきれないでいた。それを一言で表すならば、職種論はあっても、子どもの姿、「子ども支援」との関係がよく見えない、という違和感である。

この違和感は自主ゼミにおける次のような学び合いでいっそう強まったとあってよい。
同第3回の会議に筆者が提出した資料をここに再掲しておこう。

主宰加瀬：自主ゼミ〈つなプロ〉定例学習会の情景
－「人間の尊厳」班から－

「つなプロ啓蒙班」「つなプロ Café 準備班」「教育支援人材班」と並ぶ、小生がリーダーを務める学習班の、6月9日（月）17：50～の議論です。そもそも、この自主ゼミ（加瀬WG）の究極の願いは「子どもの最善の利益」の実現です。そこで、「子どもの権利条約」を読み直すことにしました。テキストは、かつて大変評判になった（1995年）、中学生女子、小口さんと福岡さんによる意識『子どもによる、子どものための、子どもの権利条約（小学館）』です。以下は、その日の、最後の到達点です。

C類Kくん：いや～、凄いつすね。ホントに中学生の意識ですか？…特に第三条の二項、〈お父さんやお母さんやそれに代わる人、そのほか子どもに“しなきゃいけないこと”がある人、そんな人たち、み～～んなが力を合わせて、ぼくら子どもが幸せになるように、護ったり、育てたり、そのほかいろいろしてくれる。国はその人たちと協力して、ぼくらを護るためにできることは全部してほしい〉、っていうところ、ここんところ、先生が最近、愚痴ってる…すんません…「教育支援人材」っていうか、「子ども支援人材」のど真ん中、剛速球・ストレートじゃないっすか？

加瀬：いや～～、ほんとだよ。僕もここは付箋、貼ってきたんだ。

D類Nさん：あの、この本で「子どもを“まもる”」って言うとき、必ず「守る」っていう漢字じゃなくて、養護教諭の「護」、にルビをふって「まもる」って使っているんですね。それで…ちょっと調べてみました。そしたら、「守る」の方は「手の中に包み込んで、放さない」という意味合いがあり、「護る」の方は「そこにある何ものかが壊れないように、外から支える」という意味があるそうなんです。なんだか、そこにこだわって「護る」っていう漢字を使っているような気がしたんです。自分が養護専攻だからかもしれないが…。

加瀬：…Nちゃん、それ、相当ステキな発言!!!…そっか、つまり、子どもの育ちを「護る」人々が親を含めて「子ども支援人材」で、学齢期の学校教育に限定したときに「教育支援人材」が定義できるかも…。え～～と、例えば、担任の先生が、クラスのA君の学びや育ちを「善意ではあるが、壊そうとしている」時に、「先生、違いますよっ！それじゃ、A君、苦しくなるだけだから」、ってセーブできる人、それが一つの典型的な子ども＝教育支援人材、って考えればいいんだよね。

N類Mさん：うーん、でも、先生は悪くなくて、SSWとかが力がないとか、おうち的にいっぱいとかもありますよね。だから、福祉の側っていうか、そっちがだめな場合に、担任の先生から指摘されることも大事だと思いますけど…。

加瀬：お～～～、それ、頂き!!!それが本当のWEコラボ、つまり福祉 Welfare と教育 Education、そして子どもをとりまく「私たち/WE」のコラボ、だよ。いや～～、いい感じだとおもう。じゃ、飲もっか!!!」

全員：サンセー、で～～～っす。

今回の取り組みは以上のような経緯の中で着想されたものである。以下、スペシャル・ワークショップの概要速報を記しておきたい。

II スペシャル・ワークショップ「教育支援人材って何？」

教員採用試験前日等の理由から、学生の参加者数は2年生と大学院進学予定の4年生中心に合計9名、ゲスト3名、筆者を入れて12名のグループワークである。ゲストは本学として少なからずお力添えを頂いている、ベテランのソーシャルワーカーにお越し頂いた。

<参加学生一覧>

氏名	性別	専攻	学年
石井みちこ	女	N 総社	2
安部敏基	男	N 総社	2
森高沙樹	女	N 総社	2
木尾夏実	女	N 総社	2
高橋麻友子	女	N 総社	3
木村奈津子	女	N 生涯学習	4
川原爽	女	A 社	4
久保田裕斗	男	C 特	4
佐藤美友貴	女	大学院特支	M2

<ゲスト一覧>

竹村睦子さん（独立型社会福祉士、町田市 SSW、他）

宮下佳子さん（東久留米市 SSW、埼玉県 SC）

黒川綱子さん（恵泉女学園中学・高等学校 SSW、（社）成年後見センター ハーモニー、他）

1. 当日のねらい、スケジュール、プレゼンの準備、会場の設営

今回のワークショップは「教育支援人材」を定義すること自体はねらいにしていない。その前の段階として自主ゼミの中で異なる学年、専攻の学生と筆者の間で生じてきた化学反応としての到達点を提示し、学校現場を深く知るゲストとリラックスしたムードの中でおしゃべりをしつつ、新たな化学反応を引き出し（ワールドカフェ方式）、我々なりの「教育支援人材」論に向けた視点を広める・深めることをねらいとした。そのためのスケジュールは次の通りである。

<スケジュール>

90分2コマ続きの演習授業を想定したものとなっている。

- ◆ 14:30～たたき台のプレゼンテーション by 「つなプロ」内WG<理論>班
- ◆ 14:45～<ワールドカフェ>方式のワークショップ（40分）×2セッション
（学生全員が半分ずつ竹村&加瀬島、宮下&黒川島を必ずまわって、気楽にトークする。学生とゲスト間での化学反応を引き出す手立て）
- ◆ 16:15～休憩
- ◆ 16:30～まとめ
（4人の島長がキーワード中心に各島における議論を紹介して、それをホワイトボードに集約しつつ議論を展開。2グループの島長同士の化学反応を引き出す手立て）
- ◆ 17:15～終了

ここで重要なのが「たたき台のプレゼンテーション」である。これまでの自主ゼミ経験から、「共有体験や共有情報なしに、学生同士による議論は展開しない、深まらない」ことを痛感してきたからである。そこで、自主ゼミ内のWG（理論班）でもみ合い、当日直前の定例学習会で共有した到達点と疑問点をまず提示して、その後にくワールドカフェ方式のワークショップ（40分）×2セッションを展開した。

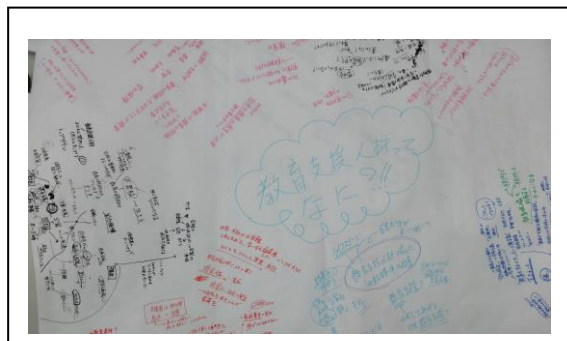
なお、ワールドカフェ方式とは何人かの会議での議論のやり方（ファシリテーション）の一形式で、与えられたテーマについて各テーブルで数人がまず議論し、次にテーブルホスト以外は他のテーブルへ移動し、そこのホストから前の議論のサマリーを聞いてからさらに議論を深め、これを何回か繰り返した後に、各テーブルホストがまとめの報告を全員にする方法である。参加者が少人数で自由に発言をしながら、他の人々の様々な意見にも耳を傾ける機会を増やすやり方、とされている。

<ワールドカフェの情景>

当初は緊張気味にスタートするが……………次第に和んでくる竹村・加瀬島



竹村&加瀬島のメモ書き終着点



学生の語りに耳を傾けつつ……………熱く語って下さる宮下・黒川島



宮下&黒川島のメモ書き終着点



<ワールドカフェ冒頭のプレゼンテーション資料>

パワーポイント自体は資料を参照されたい。以下、ポイントとなる論点を示しておこう。

■親、それに代わる人、子どもに「しなくちゃならないこと」のある人全員が子ども支援人材であり、そのうち学校教育の中で、教師と協働して直接的・継続的・計画的・意図的に子どもを支援する人材が「教育支援人材」ではないか？

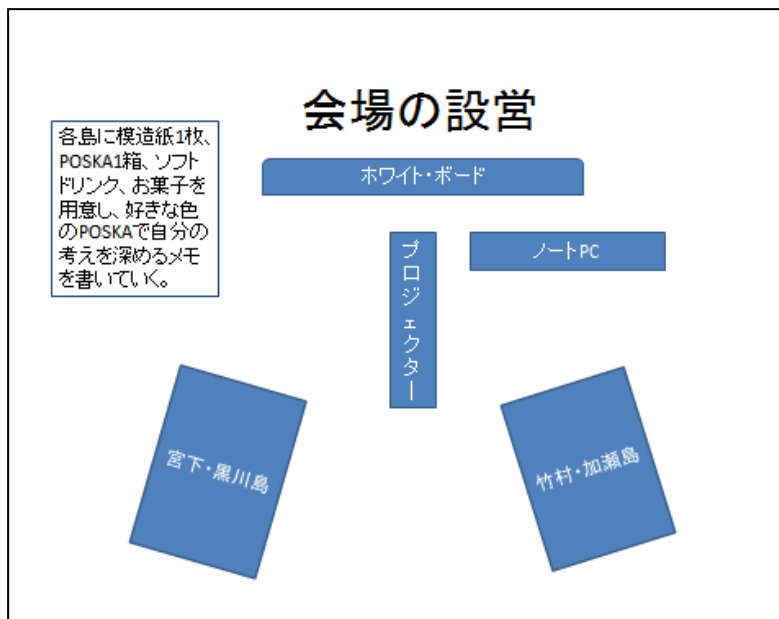
- * 学校という場で担任をパイプとして支援していく人材？
- * 担任に関わらず、学校教育の場と連携して支援する人材？
- * 教員と生徒の双方向に働きかける支援をしていく人材？
- * 子どもが身近に感じる、教育とつながりを持つ人材？

以上をたたき台として各島の議論を開始した。

<会場の設営>

なお、会場は定例学習会で活用している本学ゲストハウス「小金井クラブ」のホールおよび研修室を借用した。通常の教室とは異なり、同ホールは残響が大きいので、二部屋に

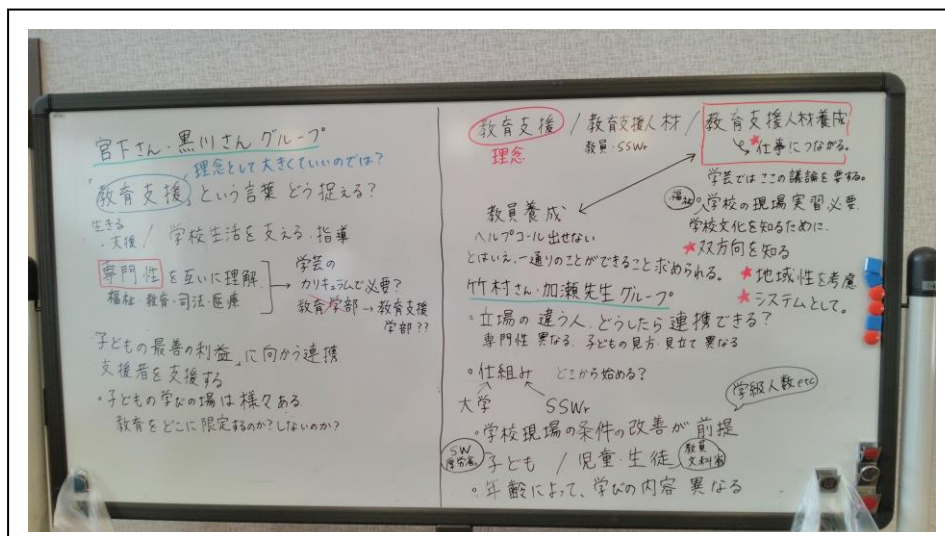
別れたが、講義棟の可動式机・60名定員程度の教室であれば、1グループ6~7名で、最大4グループまでは同時進行可能と思われる。



2. 「まとめ」の議論～島長同士の議論を経た到達点

ワールドカフェおよび「まとめ」の議論を通して、参加学生がどのような気づき、学びをしていったかについては、巻末の学生レポートを参照されたい。また本報告は未だ速報版であるため、学年や専攻等による違い、多専攻の学生同士の触発等についての分析はできていない。以上については、確定版の報告で取り扱うこととし、ここでは当日の到達点を筆者なりに整理してみようと思う。

<ホワイトボードに集約された「まとめ」の論点>



(1) 理念としての「教育支援」の捉え方

異口同音に議論されたのが、そもそも「教育支援人材」と言う場合の「教育」と「支援」をどのように捉えるかによって、「教育支援」や「教育支援人材」の論点や定義が異なってくるのではないかと、という点である。

当日のゲストがスクールソーシャルワーカーないしスクールカウンセラーとして豊富な経験をお持ちであったということも作用したと思われるが、今日の学校教育と社会福祉の子ども観の違いが浮き彫りにされたといえる。つまり「教育」をく臣民としての児童・生徒を指導する>営為と捉えるのか、<子どもの力を引き出す(ラテン語/educare)>営為と捉えるのか。「支援」をく臣民としての児童・生徒に対する教育指導を支える>営為と捉えるのか、<子どもの最善の利益を実現する>営為と捉えるのか。この基本的スタンスに呼応して、「教育支援」～おそらく理念にあたる部分～の意味合いが決定的に異なってくるはず、という立論の仕方である。

今、この立論に対する明確な解答があるわけではないが、社会福祉サイドに立脚した「教育支援」論は、「子どもの最善の利益のために、子どもの力を引き出す」統合的・総合的営為と捉えたい、というのがワークショップ当日の、おそらく全員に共通の願いであったと思われる。

(2) 「教育支援」をめぐる構造的・階層的把握の必要性

一方、議論の中で気づかされたのが、理念としての「教育支援」ないし「教育支援人材」と、職種としての「教育支援人材」やシステムとしての「教育支援人材養成」とはひとまず分けて議論する必要がある、という点である。というのも、理念としての「教育支援」を広くとれば、それに対応する「教育支援人材」は限りなく広がる(家庭教育・社会教育等も含まれるから)。しかしながら、一方で、東京学芸大学という養成システムが学生や地域住民に対して責任をもって提供しうる(必要十分な給与を得ることを想定できる/社会的に承認される活躍の場がある等)「教育支援人材」は現実的に限定せざるを得ない。

自主ゼミのメンバーも、お越し頂いたゲストも、ワークショップ全体を通じて感じていた「もやもや感」は、こうした議論の枠組みが未整理であったことから生じた、議論の焦点のぼやけであったと気づき、改めて理念としての「教育支援人材」と、現実の養成対象としての「教育支援人材」を分けて、その上で構造的・階層的に捉える必要性が共有された。議論のたたき台として提起した「子ども支援人材」と「教育支援人材」という捉え方はその意味で止揚されたのではないかと、と筆者個人としては感じているところである。

(3) 具体的な教育支援人材を捉えるための、もう一つの視点—子どものライフステージ

「はじめに」でも述べたように、ワークショップ開催まで筆者が抱き続けてきた大きな違和感、即ち「職種論はあっても、子どもの姿、「子ども支援」との関係がよく見えない」理由の一つとして、「子どものライフステージ」に応じた「教育支援人材」論を理念の面で

も、現実の養成対象としても議論してこなかったことがあげられるのではないかと、という気づきを得ることができた。

社会福祉の領域では、学校の授業づくりで重視される「学習指導案（題材観・本時のねらい・授業の展開・評価の観点等々）」とは異なり、子どもを真ん中に置いた「エコマップ」が用いられることが多い。このエコマップによって例えば教育職員と教育支援人材を書き表そうとすれば、対象となる子どもが幼小中高のどのステージいるのか、就学中か、移行期かによって、関わる教師の種類、教育支援人材の種類は当然、異なってくる。専門性や求められるコーディネータ力のクロスマップで捉える教育支援人材に加えて、この「子どものライフステージ」という視点を入れることで、「教育支援人材」を立体的に議論することができるのではないかと、という発見があったと言えよう。

(4)教育職員と教育支援人材の相互理解におけるポイント

ところで、「教育支援は、子どもの最善の利益のために、子どもの力を引き出す統合的・総合的営為である」と捉えた場合、教員養成とソーシャルワーカー養成の間にある、根本的な差異に目を向けざるを得ず、ソーシャルワーク的観点を学校教育現場にいかにか持ち込むか、相互の差異を認め合った上での協働システムをどのように構築するか、という議論なしに、「教育支援人材」論を展開しても机上の空論になる、という意見も少なからず出された。

まず、教員養成は「Solo Practice／一人で一通りのことをこなすことができる」ことを目指して展開されるが、ソーシャルワーカー養成は「Networking／ニーズ（困っている状態）のアセスメント（発見と評価）とそれを充足する社会資源を探し、つなぎ、開発することができる」ことを目指して展開されるという根本的な違いがある。これは双方を大学教員として経験してきた筆者が痛烈に実感する点である。

またゲストの方々からも、子どもの評価が「教育では減点法」、「ソーシャルワークでは加点法」であり、関わり方も「教育ではトップ・ダウン」、「ソーシャルワークではボトム・アップ」であるといった実感が少なからず語られていた。問題はどちらが正しいかではなく、まさにそこに専門性の違いを見て、その違いを知り合い、子どものために協働していけるシステム構築（個人の努力に依存せず済む公的な仕組みづくり）が同時に議論され、展開されなくてはならないのである。

なお、スクールソーシャルワーカーとしての仕事として、いかに「教師のメンタルケア」が増えているか、というリアリティもゲストから教えて頂いた点である。現実の学校現場では「先生の心のケア」をすることが、子どもの（学校生活における）支援に直結する、という点は十二分に視野に入れておきたい。このことが、即、「教育支援人材」論に直結するかどうかは議論の余地があるものの、重要な指摘と受け止めたいところである。

Ⅲ おわりに

今回のスペシャル・ワークショップ「教育支援人材って何？」の速報は以上である。このワークショップに対するエビデンス・ベースドな評価は改めて行わなくてはならず、おそらく学生諸君の今回のレポートやこれまでの定例学習会における各学生の振り返りシート（個人別ファイルとして保管）を精緻に分析する必要があるだろう。改めて、後日を期したい。

ただ、今回のワークショップを企画・運営したWGの主宰として、直感的自己評価をお許し頂けるなら、多様な専攻・学年の学生同士の学びあい、それを踏まえた現職者との学び合いは間違いなく、大きな問いに対する議論の起爆剤になる、という実感にあふれていた半日であったことは間違いない。以下は、ゲストの皆さんから頂いた、暖かいエールの一部である。

■竹村睦子さんから

（独立型社会福祉士、町田市SSW、他）

……………昨日は、大変お世話になりました。

教育支援のミッションに触れる機会をいただき、本当にありがとうございました。また、あらためて黒川さんと宮下さんのお話は、大変参考になりました。

教育に支援の視点と仕組みが当たり前位置づけられたら、救われる子どもがたくさんいると思います。そして、その大きな課題に真摯に向き合う先生ご自慢の素敵な学生の皆さんに、大きな可能性を感じました。実現に向けて、心よりのエールを送ります。

■宮下佳子さんから

（東久留米市SSW、埼玉県SC）

……………昨日は、本当にありがとうございました。

加瀬先生、竹村さんとの再会！に加えて、ご自慢の加瀬ゼミのみなさんの力のこもった準備と議論の真剣さに、若さと熱意をうらやましく感じました。これから社会人として人生をスタートされるみなさんにとって、学生時代にこうした出会いと学びの機会を経験できることは、とつても大きな財産になるはず！と感じました。加瀬先生の学生のみなさんを想う情熱の賜物ですよ！！

ご自慢のみなさんは、お幸せなみなさん・・・です。保護者的発想ですかね？？いろいろな意味で「おいしい時間」を共有させて頂き、本当に「幸せな時間」になりました。ごちそうさまでした。心より感謝申し上げます。 ^-^V

■黒川綱子さんから

(恵泉女学園中学・高等学校 SSW、 (社) 成年後見センター ハーモニー、他)

……………ワークショップ。

とても楽しかったです。さすが!!先生ご自慢の学生のみなさん。問題意識のもち方、論点整理の鮮やかさ、議論の深め方…感心させられました。

また、なにより、気持ちのもち方が素晴らしいみなさんで、私自身、リフレッシュさせていただきました^^

恵深い時間をいただき、感謝いたします。

どうか学生のみなさん方にもよろしくお伝えくださいませ。加瀬ゼミのますますのご発展を心からお祈りしております。

学生のみなさんそれぞれが自分の理想とする生き方に巡り合え、その中で最善を尽くすことができますように。

(文責：加瀬 進)